

『聖徳太子』八人物叢書

坂本 太郎著

著者はいう、聖徳太子のような不世出の偉人の伝記を書くことは、歴史家の悲しい宿命である。また、古代史家は、それぞれの抱く聖徳太子像を公けにするのが、その人の学問の成果を明らかにし、古人に対する態度を示す一つの証しともなる、ともいっている。

伝記を書くことは、個人一代の記録をつづるにとどまらない。人物の生存した時代を把握して、境涯をたどり、人物の心境に到達しなければならぬ。聖徳太子に関する事蹟は多く、史料も少なくない。しかし史実の判定がむつかしく、推古朝という時代を明白にするのも容易ではない。戦後の日本史研究が、古典の記述に対する疑いから出発し、自明とされた事象や權威づけられた学説を根本から洗いなおし、批判することにより、長足の進歩をとげ、知見を豊富にしてきた。聖徳太子に関する事象・学説についても、あらゆる角度から疑いがもたれ、きびしくみる場合、史実と認められるのは、冠位十二階制定、隋との国交「諸惡莫作、諸善奉行」「世間虚仕、唯仏是真」の言辞にとどまり、不確定要素が殖えて、太子の影を薄くさせている。また太子の生存した時代が具体化されず、反面で着想や推理にもとづく時代構想の中に、史実の確定という枠組から解き放たれた太子像が躍動している。「史実」に慎重な史学者が、太子に用心ぶかくたち向い、創造に自由な哲学者が、太子を大胆にひきよせる、というのが一般の風潮に

なっているようにみえる。

著者の日本古代史研究は半世紀を優に超える。記紀をはじめ文献史料の幅広く精緻な研究の積重ねにより、『大化改新の研究』（一九三八年）をはじめ、古代史研究の基礎がためをなされてきた。泰斗の名にふさわしい。大家は大家を知るのであろう。聖徳太子とその事蹟に関する疑義は、ほとんど却けられ、太子は不世出の偉人として復活している。古典に寄せた信頼、古人の心をたどり得た碩学の信念、とでもいふべきものがうかがえる。

『日本書紀』はじめ太子に関する文献は、著者の史料批判により選別され、事蹟が取捨される。『日本書紀』『帝説』金石文等の記述は、一部を除いて事実を伝えるものと判定され、世系・生誕・名前、撰政・三宝興隆・新羅出兵・遣隋使・冠位十二階・憲法十七条・朝儀の整備・外交の展開・講経と製疏などすべて事実と認め、積極的な意味づけがなされている。これら太子伝の骨格をなす部分から、官制・法制・服制・習俗等の細部にわたって、綿密な考証を加え、学説を取捨し、独自の判断をくだしてゆく。論及をさけたり、問題を却けることなく、太子との時代の論点をすべてとりあげ、中国・朝鮮の情勢分析とからめ、人と時代が丹念に描き出されている。古代の事象に対する熟達した見解、古文獻の一字一句もゆるがせにせぬ厳密さ、ゆらぐ価値体系に対する危惧、旺盛な探究心によって貫ぬかれた仕事である。老大家みずからいう、これが私の理解する精一杯の太子伝である、と。

（新書版・二三四頁・昭和五四年二月・吉川弘文館・一、〇〇〇円）

（名畑 崇）